

日本画の技生徒学ぶ

高志高 東京芸大 院生招き授業

東京芸術大で日本画を学ぶ大学院生による美術の

出前授業が19日、福井市の高志高で行われた。

生徒は繊細な表現や、自由度の高い日本画ならではの技を学んだ。

県が2014年から進める、日本画を活用した美術教育の推進事業の一環。県立美術館特別館長でもある手塚雄二同大教授の日本画教室で学ぶ大学院生の古山結さんと森

を演出する襖(たて)絵で、1年生19人が参加した。講師の2人は、1度塗った部分を水で溶かしてグラデーションを出す方法や、岩絵の具のざらざらした質感を利用した葉の描き方など一人一人の作品に応じた日本画の技をアドバイスした。

受講した田中秀哉さんは「濃い墨を垂らして、乾かしたり、伸ばしたりして木の立体感を出すなど『節』まで表現する工夫した描き方が学べた」。古山さんは「日本画は表現の自由度が高い。ムラや失敗、偶然も工夫次第で面白くなるのが伝われば」と話していた。

(近藤洋平)



東京芸術大の院生古山さん(左)から日本画の技を学ぶ生徒たち。19日、福井市の高志高